

# 楔形文字で日本語を書く

2

森 若葉 (もりわかば)  
京都大学大学院文学研究科附属エーラシア文化研究センター研究科外センター員

今回は前号で扱わなかった長音、拗音、促音を含む音節と数字を書いた楔形文字で書いてみよう。  
まず長音については、「おおさか」「こおへ」のように、のはず母音を繰り返して書けばよい。拗音については、しゅ、しゆ、しよの行を除いて、楔形文字で対応する文字がないため、二文字であらわす。表①に拗音の文字の一覧をあげる。また、促音については、撥音の場合のように、母音+子音の音節文字であらわすことができるが、文字数が増え、煩雑になるため、ここでは表①の最後にあげた文字で代用することにする。

次に楔形文字で数字をあらわしてみよう。古代メソポタミアでは数字が高度に発達したことが知られている。楔形文字の数の体系は六十進法に十進法を組み合わせたものである。位は一、一〇、六〇、六〇〇、三六〇〇、三六〇〇〇とあがっていく。

表②に「一から六〇まで数字をあげる。基本的に次の位にあがるまではその字形を書き並べればよい。表②の数字で五九九までの数をあらわすことができる。

表では、一の位の文字と六〇の位の文字が同じ字形になっている。これは位や文脈などから判断されるが、時代によっては異なる字形を用いて区別する場合もある。  
これで楔形文字で日本語と数字を書けるように

表①

	さ	しゅ	しよ
	ki a	ki u	ki o
	しゃ	しゆ	しよ
	sy a	sy u	sy o
拗音	ちゃ	ちゆ	ちよ
	ち	ち	ち
	にゃ	にゆ	によ
	に	に	に
	ひゃ	ひゆ	ひよ
	ひ	ひ	ひ
	みゃ	みゆ	みよ
み	み	み	
	りゃ	りゆ	りよ
	ri a	ri u	ri o
	ぎゃ	ぎゆ	ぎよ
	gi a	gi u	gi o
	じゃ	じゆ	じよ
	ji a	ji u	ji o
	びゃ	びゆ	びよ
	bi a	bi u	bi o
	ぴゃ	ぴゆ	ぴよ
	pi a	pi u	pi o
		っ	
促音			

表②

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	20	30	40	50	60
Y	YY	YYY	YYY	YYY	YYY	YYY	YYY	YYY	△	△△	△△△	△△△	△△△	Y

〈数字の表記例〉 35 (=10×3+5) 201 (=60×3+10×2+1)

〈長音を含む例〉  
大阪 お お さ か 神戸 っ お へ

〈拗音を含む例〉  
手習い塾 て な ら い じゅ く

〈促音「っ」を含む例〉  
日本 に っ ほ (おん)

〈数字を含む表記例〉  
月刊みんぱく げ っ か (あん) み (いん) ぱ く  
11月号 11 が っ っ っ

〈uという音価をもつ文字の例〉  
u「十」 △ u「草」 草 u「そして」 っ u「日」 日

なったが、いかがであろうか。

最初に楔形文字を用いたシュメール語においては、音節文字と表意文字がほぼ半々の割合で使用され、基本的に文法要素を音節文字で、名詞や動詞を表意文字であらわした。これは日本語と非常に似た書記法であるといえる。ただし、日本語のように音節文字をかな、表意文字を漢字というように、文字によって表記が区別されるわけではない。たとえば言うなら、現代の日本語のかな部分を万葉がなで置きかえて、すべて漢字で表記したようなものである。

前回、今回と代表的な音価の音節文字で五〇音表を作成したが、ひとつの文字は本来、複数の音価と意味をもち、音節文字としても表意文字としてもつかわれる。たとえば「か」の文字として用いた「𒀭」はシュメール語では、音節文字𒀭以外に、表意文字と「𒀭」[ka]、「𒀭」[ku]、「𒀭」[ka]、「𒀭」[ku]などの音価と意味をもつ。

また、楔形文字はひとつの音価について多数の文字がある。たとえば、uという音価をもつ文字は一〇以上使われている。このため、アルファベットで翻字する際、右下に番号を振って同音異字を区別する。

複雑な文字体系であるが、表意文字である漢字と音節文字であるかなを併用する日本人にとっては比較的理解しやすいシステムといえるだろう。



紀元前3000年紀末、シュメールのウル第三王朝期の手紙命令文を記した粘土板。上が表、下が裏。粘土板には縦横2〜3センチ程度のものから、30センチを超えるものまである(標本番号H94674)

【刻まれた文字と訳文】

表 1) ur-si-an-na-ra	ウルシアンナに
2) u-na-a-dug	(以下のように) 言いなさい。
3) a-sa-se, he-ma-DU	畑に私のために行くように。
4) 3 e-dur	3つの小屋を
5) ga-na-ab-zi	私は彼に渡そう。
6) tukum.(SU.GAR)-bi nu-um-DU	もし、彼が行かないなら、

裏 1) an-na-bi-dug	アンナビドゥグが
2) a-ga-de, he-mu-ni-KU.NE	水を入れる(?)のために、彼ら
	を待機させる(?)ように

※上付きのdは後の語が神名であることをあらわす。読まれないため、上に付けて表記する。  
※下付きのxは文字番号が未確定の場合。  
※大文字の表記は、文字の音価が確定できないことを示す。その場合、代表的な音価を書いてあらわす。